擬態する男性像

——FW の ALP 断章——

樋　口　日出雄

Finnegans Wake（以下 FW）の主人公 HCE の連れ合い（正式な結婚であるという確たる証拠はない）と見られる ALP の Anna という名前には、ダブリン市を貫いて流れる河（the Liffey）の別名が隠れている事実からも、ALP を語ることは、とりもなおさず、その都市と深い来歴をもつ The Liffey を語ることであるといって過言でない。

通常 ALP の章と認められている FW の断章は、ノンブルをたどるならば 196～216 という格別長いものではないが、その断章の一部始終を語ってやまないのは、他人の衣服を託されその洗濯に精を出す二人の洗濯女である。従ってこの断章は、二人の女性編年史家によるリフィ河の風物誌という側面もある。

これから筆者が論じてみたく思うのは、少々複雑になることを覚悟の上で、HCE 以外の男性人物が、この章でどのように擬態しているかを、日本語訳なども参照しながら伝えていく所存である。だがその前に、HCE や ALP が重層的に描きとられている次の場面から始めることが、いっそう事を容易に進めることになるであろう。

例によって、二人の洗濯女によって「べんべら坊や」（柳瀬尚紀訳）たちが紹介される。「べんべら坊」は「べんべら棒」でもあるのは見やすいところである。「べんべら」は “Belvedarean” という大学名でもあるので、これらの男性人物像は大学のボート部員と理解しても差しつかえあるまい。ユニフォームを着用した彼らの胸か背に刻まれたロゴは、LK という二文字である。そしてこの LK は二人の洗濯女から見て客筋に当る人物であり、おまけに鈴（Bells）をロゴに使用した下着の片方が、何者かに引きちぎられたことも二人のあいだの会話から判明する。さらに LK という二文字に被さるように、Anna's exe（筆者は Anna's axe という他の評家の論をとる）が、ユニフォームに重ねられていたという。ALP の P は Plurabelle であり、A は Anna であるから、このユニフォーム自体 ALP の属性を示していることになる。

1

このあたりを二人の女（A と B という風に仮に表記する）の問答体で写してみると、（柳瀬訳

を下敷きにしている）

A：晴れてりゃ……誰か見物にくるのか？

B：ベルヴェジィアのべんべら坊やたちだろうさ。……彼らの色物のトレーナー。それにほら、妖雲みたいな彼女（LK）の頭文字もついてる。……鍵持ちのローラのものじゃないってことを表すために、アンの斧もつけてある。（そうすると、そんな鍵など私の斧で潰してやろうという意図をしめす）

A：いやねえ、安全ピンをふりまわさないで。（safety pin の pin には、錠に差し込む鍵の心棒という暗喩もあろう）

B：ところで誰があの女のズロースの脚をひきちぎってんのかい？　どっちの脚を？

A：鈴のついたほうの脚。

これら ALP のイメージ群の上に HCE の "paved and stoned" という性格を冠せたらどうなるか。「石部酔吉」とは秀逸な柳瀬訳であるが、HCE を目して次のような文がある：

This
is the Hausman all paven and stoned, that cribbed the Cabin that
never was owned that cocked his leg and hennad his Egg.
(FW 205)

（柳瀬訳）この石部酔吉に入り込められた寝屋がけっして屈伏しなくて、
あいつの脚を雄鶏にして、あいつの卵を雌鶏かかえしたわけよ。

この文中にみる HCE（Hausman Cabin Egg）とは、先の ALP（その分身たるユニフォームの上のロゴ）との関連の糸が辿ってゆけるものであろうか。このシーンは、町の不良少年たちが HCE を真似て嘲る場面であるが、Hausman（builder）にせよ、cock（master）にせよ、双方ともに高いところで大声をあげるイメージがつきまとい、ALP という hen に向かいから威張りするだけの矮小さが目立ち、そのあたりの性格が石部酔吉といえるのであろう。

Hausman　　Cabin　　Egg
　　Axe　　Bells

上段は男同士が絡む男子系文化、後段は女同士が絡む女子系文化とよべば、現代文化に近付くといえようか。上段のアイテムはこれらを身近に備えると、男前が何割かアップするというもの

でもなさそうで、そうであればこそ、町の不良が真似てコケにする体のものであるはずである。後段はアキバ系女性が示すモバイル機のメモリーをアップグレードする仕種や、一昔前ならISDN公衆電話機からメモリーチェックする理工系ならではの境地に通じていよう。これなら、洗濯女たちの目の敵にされるのも当然で、かれらはALPを目して、「わたしの案ずるところ、彼女はチョークってとこ、(チーズまではいかないわ)」(As chalk is my judge!)というのである。

実は、Harold Bayley注によると、what is wisdom before god is to the world sheer folly and those who wish to be good here [on earth] must wear cap and bellsという考え方があり、世俗的に本物を標榜したいものは cap and bellsを身につけるべしという。洗濯女によると、Liviam Liddleという女は「派手な前びさしのとんがり帽子」(a sugarloaf hat with a gaudyquiviry peak)という出で立ちであったが、ALP似で歌に難があったという。客として歌手にだめだししつつも、洗濯女の基準ではこの女は世間的には合格圏内にいるのである。先のチョークとチーズの比喩はこのような文脈で理解すべきであろう。

2

ここで別角度より男性人物であり、帽子を冠ったグループを考えてみよう。実は、すでに帽子の男は登場しているのである。例の「町のよたもの」(cornerboys)が、ホッケイのスティックでなぐって町をひきずる人形に、三重のティアラ(教皇冠)が冠せられてあった。

You found……..
the cornerboys commocking his guy and Morris the Man,…….
with the oddfellow's triple tiara busby rotundarinking
round his scalp. (FW 205)

(樋口訳)町のよたものたちがガイ・フォークスのひきまわしみたいなことをして、それにモーリス人形なんかは オッドフェロウの三重教皇帽を頭にのっけてね。

男性といってもこれは人形であるから、あらためて全体の構図をみれば、帽子ばかりが重要な部位を占めるところから、HCE を hausman(家の主人)とすれば、この人形は houseelf(屋敷しもべ妖精)とでもいうべきであろう。ただ、ホッケイスティックという棒をもった男性キャラクターは注目しておいてよいであろう。

次のものは、一見すると最後の文の主語が女性ととられそうだが、以下に述べるように、男性を主語とするものと考える。

Warry
you sighin foh, Albern, O Anser? Untie the gemman's fistiknots,
. . . . . * She can't put her hand on him for the mo-
ment. . . . . Such a loon waybash-
wards to row.
(FW 202)

（樋口訳）小鳥のアルバーン君（雄)、なぜため息ばかりになっているの？
その男の指切りゲンマンを解こうよ！ 彼女は当分男を見分けられない。
馬鹿鳥（雄）が乱打戦で戦列復帰ができないでいるんです。

最後部の waybashwards には bash が部分的に含まれ、「こん棒でぶんなぐる」の意味があるので、拙訳は苦心した。O Anser に関しては、注釈集より anser : a genus of birds という解釈を採っている。Worry [Why are] you sighin foh, Albern, O Anser? これに答えるのが、[Because I'm] [s]uch a loon waybashwards to row. であることは、見やすいところである。乱打する男性像、これこそまさに棒をもつ男性像にふさわしいものであろう。

次に考察するのは cap and bells ならぬ cap and barrow である

and giant' s holes in Grafton's causeway and deathcap
mushrooms round Funglus grave and the great tribune's barrow
all darnels occumule.
(FW 198)

（熊谷訳）それにグラフトン通りの土手道の中にある巨人の穴と清流の意のファングラスの墳墓の周りの有毒のテングダケ、そして、あらゆる毒麦で積み上げられ隠された偉大なる民衆の指導者の墓と共に、

HCE の年老いた姿が、deathcap and barrow's cap という妙ちくりんな視覚イメージで描きとられている。その際にも、その視覚イメージの中心にあるのは、cap and cap であることは注目すべきであろう。

これの応用問題を考えてみよう。

And all the Dun-

ders de Dunnes. . . . . .
takes number nine in yangsee's hats. (FW 213)

(熊谷訳) ダンダース ド ドン一族は、＊＊＊
ヤンキー帽をかぶって、9ばんの番号をとってるのよ。

(樋口訳) ダンダース ド ドン一族は、パリ仕込の帽子をかぶって、9番アイアンを選んで、芝生に立つ。

帽子 (cap/hat) に棒 (stick) が加わる公式がわかっていれば、number nine がゴルフのアイアンであることは判る。

3

次の例はどうか

By the smell of her kelp they made the
Pigeonhouse. Like fun they did! But where was Himself, the
Timoneer? That marchantman he suivied their scutties right over
the wash, his cameleer's burnous breezing up on him, till with
his runagate bowmpriss he roade and borst her bar.
(FW 197)

先に引いた anser にならって、ここでも they/their をクグイ (鵠) という鳥に擬している訳文もある。(大沢等訳がそれである)

彼女の海草の匂によってクグイたちは鳩小屋を認めた。まさか！ だけどご本尊の棺取りはどこにいたの？ あの商人はクグイのあとを追って、浅瀬を渉り、ラクダ乗りのマントを風に翻し、さすらい舟の艫を彼女の砂洲に乗り入れて突き破った。

鳥と海との連合はノアの箱舟の伝説以来有名であるが、ここに見るクグイの群れは商人であるHCE がそのあとをおって、ALP のありかを付きとめるよすがとなっているのである。確言はで

きないが、大沢等訳のクグイは anser こと anserine の訳語として選ばれているのかも知れない。

ここで筆者が最もたよりとする C.C の注釈を参照すれば、scatty: the wren（ミソサザイ）とあり、さらに cameleer: the diver of the canal<the driver of the camel（ちなみに小学館 Progressive 英和辞典によると、diver：（鳥）水にもぐる鳥、（特に）アビ、カイツブリ（loon）の類）とあり、これを敷衍すれば、cameleer's burnous は loon's mantle（カイツブリの襟羽）である可能性がある。さらに、the smell of her kelp:＝the small of her kelp（海草の匂い）＝（海草の茎）とあり、HCE が hausman〔大工〕であることに徴して、これをトンカチ代わりに使って鳩小屋を作ったといえるであろう。Hausman//cabin の連鎖はこれに通じている。我々の文脈では、the small of her kelp は棒状のものであり、これに冠りものが加わって一人前のキャラクターが誕生するとした。フードつきマントがそれであろうが、これとても鳥類のイメージから来る「カイツブリの襟羽」となる可能性を指摘したことになる。

4

ALP が HCE の遺伝子を包む容器だとして、ジェイムズ・ジョイスが愛したリフィ河のほとりは、ALP によって、この容器というカメラによって、デジタル撮影されているようなものである。ALP をアキバ系女性に仮定した我々の文脈では、そのデジタル画像をテクスト化したものがこれらの擬態する男性像であろう。

我々が「冠りもの」とか「棒状のもの」とか規定したものは、これらデジタル化された遺伝子の姿であったといえるかも知れない。あるときは「棒状のもの」が「海草のくびれた茎」であったりした。そして「冠りもの」についても鳥類の「襟羽」のようなものまで含まれることを知った。リフィ河に流れつく海草とか、川面に見え隠れする水鳥が HCE の遺伝子とアナロジカルな関係を結んでいるのである。

二人の洗濯女の会話の話題となるのが、ALP が息子の Shem から取り上げた郵便袋である。

> My colonial, wardha bagful! A bakereen's dusind with tithe
> Tillies to boot.　That you may call a tale of a tub!　And Hi-
> Bernonian market!　All that and more under one crinoline enve-
> lope if you dare to break the porkbarrel seal.
>
> (FW　212)

〔樋口訳〕なんと言うことなの、こんなにいっぱい！量目不足を怖れて一ダースでよいのにおまけが一個。迷惑なほ桶た話！　アイルランドの売れ口は冬のマーケット。地方交付金の

シールをはがしてみても、スカートの包装が関の山か、その程度のものよ。

ALP を容器に仮定しながら、こういうのも変だが、bagful といわれる品物をくばってもらった人々は、これらの品物を厄病と感じて逃げに転じた。(No wander they'd run from her pison plague)。ALP がリフイ/Anna という流動性の容器なら、人々は「桶」でその容量を計ることしかできなかったのである。Bag を「冠りもの」と断じるには　多少の無理が伴うが、怪しげな帽子の男性像は、アメリカ史で言う bag packers に通じるものがあろう。そしてアメリカに渡ったアイルランド系ゴルファーの姿は、すでに指摘したとおりである。

これら「冠りもの」や「棒状のもの」でコスチュウムの妙を味わい尽くす者の姿を、いわゆる the stage Irish と見て大禍ないのではないか。Irish opera に出てくる、それも 1780〜1925 年という時期をカヴァーするアイルランドの国民性を指すものとしてこの言葉を使うと、ジョイスとオペラとの関連で結ばれた糸は、劇中の曲と Stage Irish としてのジョイスの作中人物を縫いとめている。　たとえば、作中の Lilt a bolero, bulling a law! というカンマで二分された文句は、何れもオペラの歌詞であるという。だがボレロ（スペインの舞い）を舞う人物に付きまとうのは、短めのズボンであり、法を無理強いする人物に付きまとうのは、古代ローマの護民官のように「棒〔杖〕」を持つものの影である。この直前には Hing the Hong is his jove's hangnomen（キング・コングがあいつのジュピターにもらった添え名さ）とある。映画「キング・コング」(1933) はこの作品が発表されると時を同じくして、大西洋の両岸で上映されつつあった。そしてこの映画こそ、人々を映画館（多くはオペラ座という添え名をもっていた）に駆り立てる大作であったことは言うまでもない。ジョイスもまた ALP の章を stage Irish を主人公とする金字塔として仕上げつつあったのである。

5

With neuphraties and sault
from his maggias. And [. . . . . .] she'd cook him
(FW　199)

（樋口訳）閣下の新ジャガと塩分をもって、彼女（ALP）はかれ（HCE）におさんどんをするつもり……

この文中においても、ジャガイモと塩という最もありふれた食材を用いて彼女は、最大の stage Irish ぶりを発揮している。His maggias/his majesty は食の王様として彼女にかしずか

れているのであろう。確かにジョイスの筆は相手かまわず、キング・コング並に無茶苦茶に走り出すこともあるのだが、男性像として stage Irish という確たる像を用いている限り、それに付き添う女性像についても、それ相応の配慮をしていると言うべきであろう。以上 ALP の章につき合ってみての偽らざる感想である。

各ハイパーテクストのアドレスを掲げる；

1．熊谷：http://www5c.biglobe.ne.jp/^the wind/alpinpro.htm

2．C.C: http://members.tripod.com/Sinkest//1024chapter8/1024fwtekst8.htm

3．Nigel Best:http://nigel.orcon.net.n2/again/again6.html

Works cited:

4．柳瀬 尚紀：「フィネガンズ・ウェイク」（東京：河出書房新社、1991, 1996）

（注）Bayley の意見は上記ハイパーテクスト 3．より孫引きしたものである。